

## 第3章

### 「病院内教育における自立活動の在り方の研究事業」

#### 本章の構成(目次)

#### I 病院内教育について

- 1 病院内教育における課題…………… 52 ページ
- 2 病院内教育における自立活動の指導…………… 53 ページ

#### II 自立活動の指導の充実に向けて

- 1 実態把握から具体的な指導内容を設定する…………… 54 ページ
- 2 実態把握を行うための工夫…………… 55 ページ

#### III 引継ぎ等の連携の充実に向けて

- 前籍校への引継ぎ…………… 60 ページ

#### IV 実践事例…………… 61 ページ

# I 病院内教育について

## 1 病院内教育における課題

病院内教育は、慢性の呼吸器疾患、腎臓疾患及び精神疾患、悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療又は生活規制を必要とする児童・生徒を必要とする程度のものを対象としています。（学校教育法施行令第22条の3）

都立特別支援学校では、毎年約160人程度の児童・生徒が、病院内教育を行う特別支援学校に転入（学籍を異動）し、病院で治療を受けながら教育を受けています。

病院内で学ぶ児童・生徒は、

- 入院や治療、体調不良等のため学習時間の制約や学習できない期間（学習の空白）などがあるため学びが定着せず、学習が遅れる場合がある。
- 活動の制限等により、学習の基盤となる体験が不足するため、理解が難しい場合がある。
- 病気の状態等も個々に異なっているので、個々の児童・生徒の学習の状況を把握するとともに病気の状態や学習時間の制約、発達の段階等も考慮する必要があるため、より早期での実態把握が必要となる。
- 各教科の内容は、前学年までに学習したことを基盤にしてあるが、前籍校と教科書や学習進度が違ったり、学習の空白があったりするため、学習事項が断片的になる、学習していない、学習が定着していない。

といったことがあります。

また、医療の進歩や社会の状況等とともに治療は変化してきており、入院の短期化や頻回化が進んできていることから、身体の不調、治療への不安や戸惑い、活動等の制限があることによるストレスに加えて、入院生活から、家庭等での療養に移ることや元の学校に戻ることに伴う環境の変化等、多くの不安を抱えています。



このように、入院・治療の影響による多種多様な要因が組み合わさり、治療や病状の変化に応じて、不安やストレスが変化していきます。そのため、児童・生徒の不安等を軽減させ、自分の気持ちや情緒をコントロールして状況に対応していくことなどに関する支援が重要となります。教育の場面では、心理的な安定を得るために、教師との信頼関係を作り、そこから人間関係を広げたり、自分の苦手さを補うスキルを身に付けたりする等、それぞれに必要な力を身に付けていくことが重要です。

そのため、病院内教育では、次の点に十分に配慮していく必要があります。

### 【入院中】

- 心理的な安定を図るとともに、自身の体の状態等について理解することなどを通して、学習上、生活上の困難さを改善できるようにする。
- 早期に実態把握を行い、適切な学習機会を確保し、学習内容を充実させる。

### 【退院に向けて】

医学等の進歩に伴い入院の短期化や入院の頻回化（繰り返しての入院）、退院後も引き続き医療や生活規制が必要となるケースの増加など、病院内で学ぶ児童・生徒の治療や療養生活は大きく変化してきています。そのため、短期間で治療や生活する場が変わることが増えてきています。

- 治療後の生活に戻るためのよりよい支援、配慮を行うための引継ぎを確実に行う。

## 2 病院内教育における自立活動の指導

自立活動とは、特別支援学校の教育課程において特別に設けられた指導領域です。自立活動の目標は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」（特別支援学校小学部・中学部学習指導要領）ことです。

病院内で学ぶ児童・生徒においては、健康状態の維持・改善に向けて、運動や安静、食事などの日常の諸活動で、必要な服薬を守るとともに、病気や障害の特性等を理解し、心身の状態に応じて参加可能な活動を判断し、必要なときに必要な援助を求めることができることなど、病気の自己管理能力を育成することが重要です。

児童・生徒の中には、治療の副作用による貧血や嘔吐などが長期間続くことにより、情緒が不安定になることがあります。その際、悩みを打ち明け自分の不安な気持ちを表現できるようにしたり、心理的な不安を表現できるような活動をしたりするなどして、情緒の安定を図ることを目標とする指導が大切です。

また、心身症の児童・生徒の場合、心理的に緊張しやすく、不安になりやすい傾向があります。さらに身体面では、嘔吐、下痢、拒食等の様々な症状があり、日々それらが繰り返されるため強いストレスを感じることがあります。こうした児童・生徒が、自ら情緒的な安定を図り、日常生活や学習に意欲的に取り組むことができるようになるためには、教師が病気の原因を把握した上で、本人の気持ちを理解しようとする態度で関わることが指導上で大切です。

自立活動の指導を計画する際には、入院治療中の児童・生徒の治療の状況や心理状況など、一人一人の実態を丁寧に把握し、指導目標、内容を設定する必要があります。

自立活動の指導を効果的に行うためには、次のような流れで考えていきます。

- 個々に応じた指導目標、内容を設定する。



転入当初(入院時)

- ➡児童・生徒の実態を踏まえて、具体的な指導内容を設定します。そのため、対象となる児童・生徒の現在の姿のみにとらわれることなく、入院に至る経過や背景、病院内教育で指導可能な期間、退院後までに育みたい力との関係などを総合的に勘案し、中心的な課題を整理する視点を明確にする必要があります。
- ➡そのために、前籍校からの学習状況や生活面の状況等の引継ぎを確実に行うことが必要です。

- 指導の経過を評価し、見直す。



学期末等(指導経過)

- ➡設定した指導目標、内容に基づき評価し、児童・生徒の達成状況を把握するとともに、指導を振り返ることで、指導の改善を行います。

- 情報を共有し、確実に引継ぐ。



転出時(退院時)

- ➡医療関係者等と情報共有することで、丁寧に保護者や前籍校の担任等へ児童・生徒のことについて引継ぎます。
- ➡前籍校の担任等と学習状況等を共有するとともに、児童・生徒の心理的な側面を含めた引継ぎを行います。

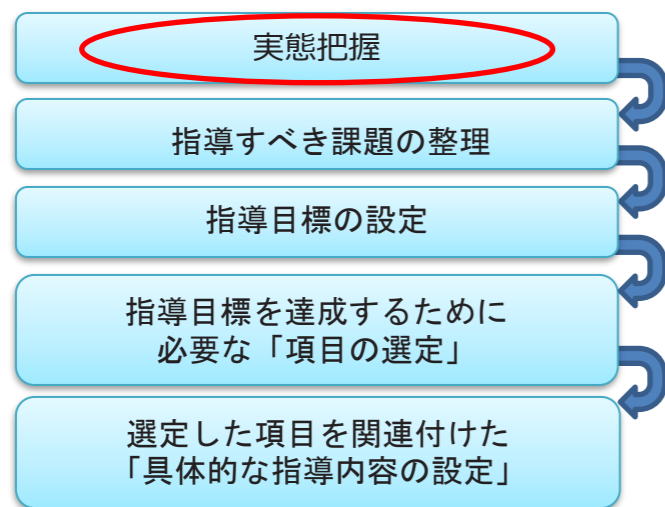
## II 自立活動の指導の充実に向けて

### 1 実態把握から具体的な指導内容を設定する

自立活動の指導を行う際には、実態把握から具体的な指導内容を設定する必要があります。そのため、児童・生徒の実態を踏まえて、具体的な指導内容を設定するため、「流れ図」（実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例）を作成し、自立活動の6区分27項目と関連付けて整理し、指導目標、内容を設定します。

以下は、自立活動の実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）の具体的な指導内容を設定するまでの過程を整理しました。

実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例



<特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編を参考に作成>

・自立活動の指導に当たっては、**実態の的確な把握に基づいて個別の指導計画を作成することが特に重要です。**  
 ・障害の状態等は一人一人異なっています。自立活動では、それぞれの障害による学習上、生活上の困難を改善することを目標にしているため、**一人一人の指導内容、方法も異なってきます。**そのため、適切な実態把握が指導目標の設定において重要となります。

## 2 実態把握を行うための工夫

### (1) 実態把握のための視点

入院や治療による心理的に不安定な状態にある児童・生徒や、長期欠席による学習の空白や社会経験の不足がある児童・生徒など、様々な状況が考えられます。

例えば、心身症や精神疾患の児童・生徒は、<sup>にちなみ</sup>日内変動が激しいため、常に病気の状態を把握し、例えば過度なストレスを与えないなど、適切に対応する必要があります。

そのため、前籍校との連携を密にするとともに、以下の視点で実態把握をする必要があります。

- 病気の有無や状態
- 生育歴
- 基本的な生活習慣
- 人やものとのかかわり
- 心理的な安定の状態
- コミュニケーションの状態
- 対人関係や社会性の発達
- 身体機能、視機能、聴覚機能、知的発達や身体発育の状態
- 興味・関心
- 障害の理解に関すること
- 学習上の配慮事項や学力
- 特別な施設・設備や補助用具（機器を含む）の必要性
- 進路
- 家庭や地域の環境等

<特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編より>

実態把握に当たっては、保護者等からの聞き取りとともに、前籍校からの引き継ぎや医療機関との連携などから広く情報を収集する必要があります。また、治療等により病状が変わっていくことから、入院等の早期からの実態把握が必要になります。

### (2) 「ふりカエルシート」を活用した実態把握

「ふりカエルシート」とは、児童・生徒自身が学習面、学校生活面などを自ら振り返ることで、自分自身のことを客観的に理解するためのツールとして、本事業の研究指定校の実践から、広範囲の学校で活用しやすいように項目等を整理し、作成したチェックシートです。また、児童・生徒が自身で記載する際に親しみやすいように「ふりカエルシート」という名称にしました。

「ふりカエルシート」は、入院や治療による心理的に不安定な状態にある児童・生徒、長期欠席による学習の空白期間や社会経験の不足がある児童・生徒の学習面や学校生活面の実態を把握し、指導目標・内容を検討する際に活用することができます。また、児童・生徒自身が自己評価をすることで、自分の長所や得意なことを把握することができます。

### (3) 「ふりカエルシート」の概要

次の6項目から構成されています。

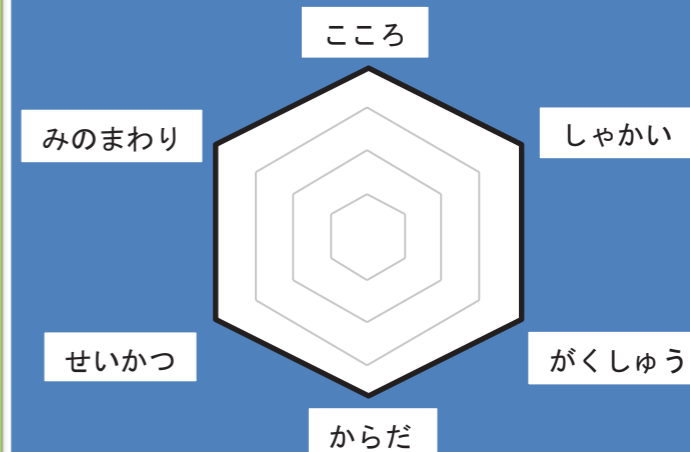
- ◆ ころ
- ◆ しゃかい
- ◆ がくしゅう
- ◆ からだ
- ◆ せいかつ
- ◆ みのまわり

※この6項目は、自立活動の6区分  
 「健康の保持」  
 「心理的な安定」  
 「人間関係の形成」  
 「環境の把握」  
 「身体の動き」  
 「コミュニケーション」  
 と関連しています。

これらの各項目の評価から、課題の検討をすることができます。

本シートは、自己評価だけでなく、教師も各項目について、児童・生徒の日常的な行動観察などから各項目を計画していきます。各評価を比較することで、課題を見出ししていくことができます。また、自己評価が高い項目も長所や得意なこととして把握する等、課題を検討する際に活用することができます。

### 6つの項目



6つの項目は、不安・悩み、感情のコントロール等を把握する「ころ」と身体症状や体調、巧緻性等を把握する「からだ」を対に表記することで、関係性を表しました。

他の項目についても、「しゃかい」（社会生活、ルール等）に対して「せいかつ」（学校生活、スケジュール等）、「がくしゅう」（学習状況、処理能力等）に対して「みのまわり」（生活リズム、食事等）となるように作成しました。

病院内で学ぶ児童・生徒は、治療や病状等から行動に制限がある場合があるため、例えば「しゃかい」の項目の評価が低い場合は、社会生活を円滑に送ることができるよう具体的な体験等を通して学ぶ機会を増やす、「せいかつ」の項目の評価が高い場合は、施設や人材を活用し、行動範囲を広げる等の指導上の工夫が考えられます。

■ 児童・生徒が自分自身でチェックすることで、現在の状況等を振り返りながら、気付くことができます。

■ 児童・生徒の自己評価と教師による評価の比較・検討をすることができます。

（ただし、教師による評価の活用は、教師のみとする等の配慮が必要）

① 児童・生徒用ふりかエルシート【高学年用】

- ・児童・生徒用は、低学年用と高学年用の2種類あります。
- ・児童・生徒用の各項目は、肯定的な表現で構成しています。

観察項目等	観察内容・場面の例	評価					結果	
		低 ← 高						
		まったく思わない	それほど思わない	半分くらいは思っている	まあまあ思っている	そう思う		
こころ	KK1 不安や悩みはありません。	いつも	1	2	3	4	5	全然ない
	KK2 自分の気持ちは穏やかです。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	KK3 気になることがあっても気持ちを切り替えてやるべきことができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	KK4 自分の気持ちをコントロールできます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	KK5 自分の気持ちを言葉にした文章で表したりすることができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
計							0	
しゃかい	SY1 集団での活動ができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	SY2 社会や学校、ゲームなどのきまりやルールを守れます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	SY3 相手にチクチク言葉や嫌なことを言いません。	できない	1	2	3	4	5	できる
	SY4 困ったとき、自分から相談することができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	SY5 表情や態度を見て、相手の気持ちを察することができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
計							0	
かくしゅう	G1 先生の説明や指示が分かります。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	G2 文を読んで、内容を理解することができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	G3 黒板や教科書などの内容を書き写すことができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	G4 集中力があります。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	G5 苦手な教科の勉強も取り組もうとすることができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
計							0	
からだ	KR1 体調はいつも安定しています。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	KR2 手や指を動かして行う細かい作業は得意です。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	KR3 自分の思うとおりに動いたり運動したりすることができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	KR4 必要なときには、じっと待つことができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	KR5 周り(音、光、匂い、声、感触など)が気になって、困ったりつらくなったりすることははありません。	いつも	1	2	3	4	5	全然ない
計							0	
せいかつ	SK1 予定が変更されても平気です。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	SK2 見通しをもって計画的に行動できます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	SK3 整理整頓ができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	SK4 忘れ物しません。	いつも	1	2	3	4	5	全然ない
	SK5 いつも落ち着いて過ごすことができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
計							0	
みのまわり	MM1 季節や目的に合った持ち物の準備や服そうができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
	MM2 自分の体調を理解しています。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	MM3 身だしなみに気を付けています。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	MM4 好きな活動や趣味があります。	まったく思わない	1	2	3	4	5	そう思う
	MM5 ストレスに対処することができます。	できない	1	2	3	4	5	できる
計							0	
合計	1 こころ	0						
	2 しゃかい	0						
	3 かくしゅう	0						
	4 からだ	0						
	5 せいかつ	0						
	6 みのまわり	0						

② 教師用ふりかエルシート

- ・教師用は、「落ち着きがある」など、課題が「ない」ことよりも、気になることや課題の「有無」を把握することが目的のため、児童・生徒用とは異なる表現で構成しています。
- ・評価は、1…当てはまる 2…やや当てはまる 3…当てはまるときもある 4…ほぼ当てはまらない 5…当てはまらない という項目で構成し、児童・生徒の肯定的評価による数値と一致するようにしています。

観察項目等	観察内容・場面の例	評価					結果
		低 ← 高					
		当てはまる	やや当てはまる	当てはまるときもある	ほぼ当てはまらない	当てはまらない	
こころ	KK1 ①不安感が強い、悩みがあるなどで、笑顔やリラックスした姿を見せることが少ない。	1	2	3	4	5	
	KK2 ②自分の浮き沈みが激しい、過去にあった嫌な出来事などを脳裡に思い出す、動揺しやすい。	1	2	3	4	5	
	KK3 ③一つのことにとどまると他のことが考えられなくなる、活動を終了したり、次の活動にスムーズに移行したりできないことがある。	1	2	3	4	5	
	KK4 ④感情のコントロールができず、衝動や怒りなどを行動で表す。	1	2	3	4	5	
	KK5 ⑤自分の気持ちを言葉や文字で表現することが苦手で、感情を読み取りにくい、突然怒り出したり泣き出したりすることがある。	1	2	3	4	5	
計							0
しゃかい	SY1 ①集団での活動に参加できない、集団でいることに疲れや負担を感じるようである。	1	2	3	4	5	
	SY2 ②年齢や発達段階に応じた学習や学校生活のきまりやルールなどを守ることができない、自分の判断で衝動的に行動することが多い。	1	2	3	4	5	
	SY3 ③相手のことを考えた言動ができない、自分の言い分だけを一方的に話すなど、失敗や言い間違いに対して、相手が認めるまで指摘し続ける。	1	2	3	4	5	
	SY4 ④教師などの身近な大人で心を閉ざす相手がい、できない、やりたがえない、困ったなどを自分から表出さない。	1	2	3	4	5	
	SY5 ⑤場の状況や相手の表情、態度と結びつけて感情を推し量ることができない。	1	2	3	4	5	
計							0
かくしゅう	G1 ①教員の説明や指示などを聞き、要点を理解することが困難である。	1	2	3	4	5	
	G2 ②文章の意味のまとまりとして読み理解することが困難である。	1	2	3	4	5	
	G3 ③文字の書き写しや、漢字や特殊音節などを正しく書くことができない。	1	2	3	4	5	
	G4 ④問題に気をとられるなどし、一定時間集中して学習や活動に取り組むことができない。	1	2	3	4	5	
	G5 ⑤学習の習慣や授業参加の態度が身に付いていない、苦手な学習から逃避しようとする。	1	2	3	4	5	
計							0
からだ	KR1 ①心理的に不安定なときに、頭痛や腰痛、過呼吸など特有の身体症状がみられる。	1	2	3	4	5	
	KR2 ②手や指先を使った操作が苦手である。(服薬、治療によるものを除く)	1	2	3	4	5	
	KR3 ③体力が弱い、早く動く、止まるなど思うとおりに動くことができない。(服薬、治療によるものを除く)	1	2	3	4	5	
	KR4 ④多動があり、じっとしていることや、待つことができない。	1	2	3	4	5	
	KR5 ⑤におい、光、音、感触などの感覚過敏がある。	1	2	3	4	5	
計							0
せいかつ	SK1 ①急な予定の変更を受け入れることができない。	1	2	3	4	5	
	SK2 ②学習や活動への見通しがもちにくい、集合時間や期日などを意識して行動することが苦手である。	1	2	3	4	5	
	SK3 ③身の回りの整理や持ち物の管理などができない。	1	2	3	4	5	
	SK4 ④きまりや約束、時間を守ることなどへの意識が薄い、忘れ物が多い。	1	2	3	4	5	
	SK5 ⑤学校生活への拒否感や不安感が強い。	1	2	3	4	5	
計							0
みのまわり	MM1 ①寒暖差や場の状況に応じた服装の選択や持ち物の準備ができない。	1	2	3	4	5	
	MM2 ②服薬などの体調管理が自分でできない、体調の変化にも気づきにくい。	1	2	3	4	5	
	MM3 ③鏡を見て髪や服装を整えるなど、他人から見た自分を意識することができる。	1	2	3	4	5	
	MM4 ④好きな活動や熱中して取り組めることがない。	1	2	3	4	5	
	MM5 ⑤ストレスへの対処ができず、苦手なことから逃げたり拒否的な態度をとったりする。	1	2	3	4	5	
計							0
合計	1 こころ	0					
	2 しゃかい	0					
	3 かくしゅう	0					
	4 からだ	0					
	5 せいかつ	0					
	6 みのまわり	0					

#### (4) 「ふりカエルシート」の活用例

- 活用方法
- ① 児童・生徒が自分で、ふりカエルシート【低学年用、高学年用】記入する。  
(児童・生徒の自己評価)
  - ② 教師が、ふりカエルシート【教師用】を記入する。  
(教師による児童・生徒の評価)

①児童・生徒の自己評価

児童・生徒自身が、課題としての認識がある。  
↓  
指導、支援・配慮が必要

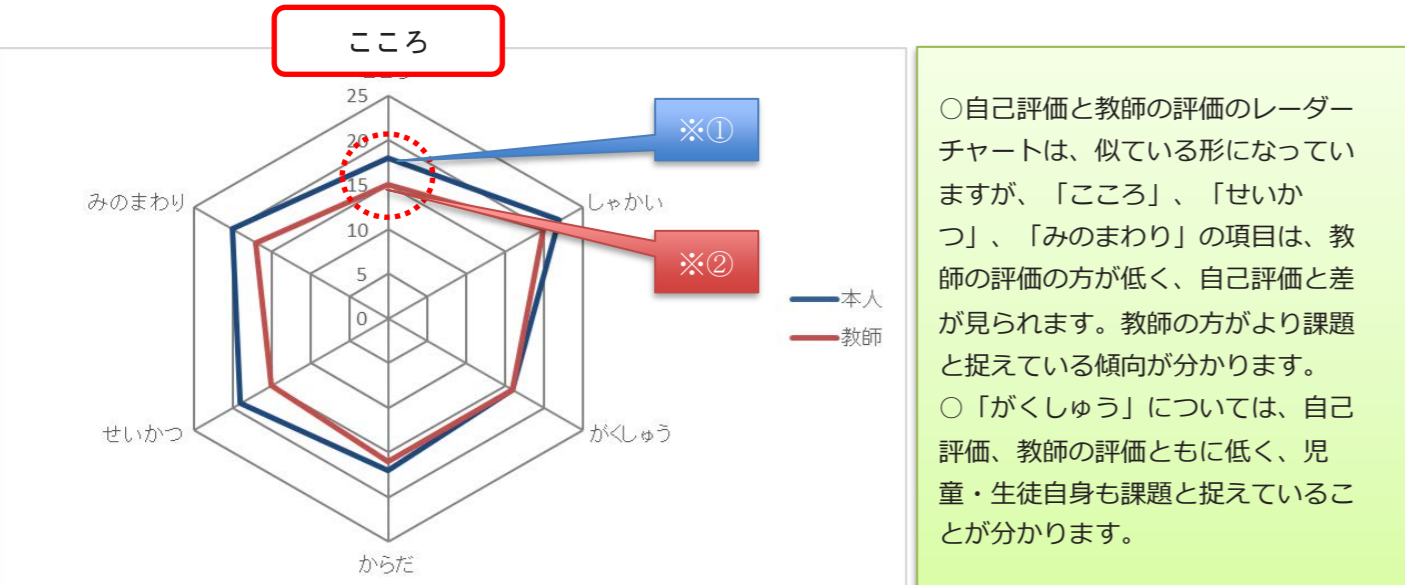
観察項目	観察内容・場面の例	評価
1 こころ	①不安やなやみはありません。	1 2 3 4 5
	②おちついた気持ちですごしています。	1 2 3 4 5
	③気になることがあっても、気持ちをきりかえることができます。	1 2 3 4 5
	④自分の気持ちをコントロールできます。	1 2 3 4 5
	⑤自分の気持ちを人に話したり、紙にかいたりできます。	1 2 3 4 5
計	※①	17

②教師による児童・生徒の評価

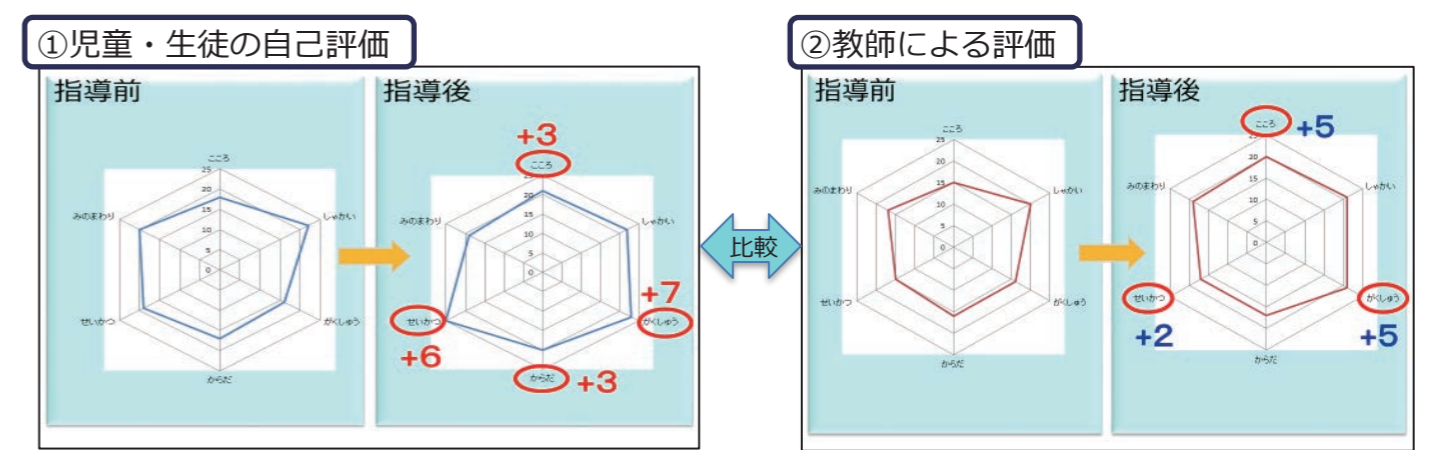
教師が、課題があると把握している。  
↓  
指導、支援・配慮が必要

観察項目	観察内容・場面の例	評価
1 こころ	①不安感が強い、悩みがあるなどで、笑顔やリラックスした姿を見せることが少ない。	1 2 3 4 5
	②気分の浮き沈みが激しい。過去にあった嫌な出来事などを脈絡なく思い出す。動揺しやすい。	1 2 3 4 5
	③一つのことにごだわると他のことが考えられなくなる。活動を終了したり、次の活動にスムーズに移行したりできないことがある。	1 2 3 4 5
	④感情のコントロールができず、衝動や怒りなどを行動で表す。	1 2 3 4 5
	⑤自分の気持ちを言葉や文字で表現することが苦手で、感情を読み取りにくい。突然怒り出したり泣き出したりすることがある。	1 2 3 4 5
計	※②	15

#### ③ふりカエルシートの結果（実態把握）



#### (5) 学期末の振り返り



○自己評価では、特に「がくしゅう」「せいかつ」の向上が顕著で、「こころ」「からだ」についても自信をもてていることが分かります。

○教師による評価でも「こころ」「がくしゅう」「せいかつ」の面で向上し、自己評価ともほぼ一致しました。

以下、指導後の分析（一部抜粋）です。

○興味のあることには集中力を発揮できるという良さを学習面に生かせるようになってきました。学習開始当初は、ノートやプリントは全て平仮名で書いていたのが、今では、毎日難読漢字を自分で調べて覚え、漢字検定5級のプリントに一生懸命に取り組んでいます。

○学期末等の指導後にふりカエルシートを実施することで、それぞれの項目の変化を把握するとともに、児童・生徒が成果（変化）を振り返ることで自己理解にもつながります。

### Ⅲ 引継ぎ等の連携の充実に向けて

#### 前籍校への引継ぎ

入院時からの各教科等の学習状況や自立活動の時間の指導等（生活面の状況）の成果（変化）を引継ぎの資料として活用します。その際、具体的な指導の経過等の記録を提供し、医療関係者等や保護者、前籍校の担任等が連携することで、児童・生徒が復学した後も必要な配慮等が継続され、安心した学校生活が送れるようになります。

